

連続性のある学びの場を意識して準備に取り組んだ事例

特別支援学校（知的障害）の生徒が居住地の中学校で 体育の授業を中心に取り組んだ交流及び共同学習

○概要

A生徒は、B特別支援学校に在籍する中学部2年生であり、知的障害のある生徒である。A生徒は日常的な会話ができ、スポーツが得意な生徒である。本事例は、A生徒がC中学校で体育の授業を中心に交流及び共同学習を実施した取組である。A生徒は、地域の小学校から特別支援学校に転入学する際、「地域で友達がほしい。兄と同じ中学校で勉強してみたい。」という思いがあった。また、保護者も「A生徒の思いを大切にしたい。将来、A生徒にとって暮らしやすい地域であってほしい。」と願い、昨年度から継続してC中学校での交流及び共同学習を希望した。C中学校の体育の授業は、ユニバーサルデザイン化されており、A生徒にとって分かりやすい授業であった。また、C中学校の体育担当者によるA生徒への個別の配慮がなされたことで、毎回安心して体育に参加することができた。

1. 対象生徒について

A生徒 : B特別支援学校中学部2年生（知的障害）

2. 活動のねらい

A生徒は、小学部の頃から居住地校との交流及び共同学習を行ってきた。B特別支援学校中学部に進学する際にも「地域で友達がほしい。兄と同じ中学校で勉強してみたい。」などの本人の思いがあり、居住地のC中学校でも交流及び共同学習を継続して行うこととした。保護者も「将来、A生徒にとって暮らしやすい地域であってほしい。」との思いで通常の学級での交流及び共同学習を希望した。昨年度、意欲的に交流及び共同学習に参加する様子が見られたことから、今年度も継続して行うことを保護者及びA生徒も希望した。

A生徒にとっての交流及び共同学習のねらいは、地域の友達と活動する経験を重ね、地域社会で生活する積極的な態度を養ったり、社会性を育んだりすることにある。また、A生徒が得意とする体育の授業による交流及び共同学習を行う中で、A生徒自身から友達に関わろうとする積極性を育てると同時に、体育が得意なA生徒の生き生きとした姿をC中学校の生徒が知ることによってA生徒への理解につながると考えた。

3. 事前の取組と配慮

交流及び共同学習を実施するに当たり、A生徒及び保護者の意見を尊重しながら、

できる限り連続性のある学びの場を設定することを考慮した。その結果、B特別支援学校、C中学校の通常の学級、C中学校の特別支援学級の3つの学習場面を設定することとした。C中学校には、特別支援学級が複数あり、特別支援教育を専門とする担当者がいて連携会議をいつでも開催することができる状況であった。

A生徒は、一斉指導の中で言語による指示を集中して聞くことが苦手である。そこで、できる限り視覚支援教材や実演を取り入れた指示説明を行うようにしたり、個別の声掛けを行いA生徒に指示内容を確認するようにしたりした。また、会話の中で、一方的に話をする傾向にあり、相手の話をじっくりと聞くことが苦手である。そこで、B特別支援学校の自立活動の時間に、ソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、話の聞き方や会話のマナーなど様々な場面設定でコミュニケーションスキルを高める学習を行った。

体育の授業は、2クラス合同で行う時間割だったところを、1クラス単独の授業に時間割を変更した。少人数にすることで、全体への指示が聞きとりやすくなり、A生徒にとっても分かりやすい授業となった。昨年度は柔道の受け身の学習に参加し、A生徒もやる気を見せていたが、技能差が大きくなり安全の確保が難しくなってきた。今年度はA生徒の興味関心を考慮し、サッカーやソフトボールなどの球技に参加することにした。授業では、仲間同士で協力・協調し合える活動が数多く設定された。そこで、ペアになる生徒を、支援の得意な生徒にしたり、技能のレベルが同じような生徒にしたり、手本となるような生徒にしたりするなどの配慮を行った。しかし、A生徒が他の生徒と同等に活動できそうな場面では、いろいろな生徒とペアを組めるように、活動によって柔軟に対応した。

4. 活動の様子と成果

体育の授業では、他の生徒が落ち着いた学習態度で臨んでいたため、A生徒にとっても集中しやすい環境となり、聞く態度の向上につながった。体育担当教員が指示を出す際には、一度に多くのことを指示しないように配慮し、学習内容を徐々にレベルアップする学習展開になるように工夫したことで、A生徒がめあてを意識して活動することにつながった。実技では、A生徒は他の生徒と同様の活動ができるため、学習内容の変更調整を行わず、指示が分かりやすいように、ボールの蹴り方やパスを出す場合の動作などについて、細かく分けて体育担当教員が手本を見せて、その都度練習をするようにした。

A生徒は、昨年度から継続して行っている交流及び共同学習を通して、様々な新しい学習を経験し、達成感を味わったり興味関心が広がったりしている。昨年度に参加した英語の学習の経験から、B特別支援学校においても意欲的に取り組む様子がみられる。また、体育では、新たに球技にも参加したことで、休み時間に進んで高等部の生徒と球技に取り組んだり、部活動の大会に向けて練習に励んだりする様子が見られ

ている。

友達関係においては、最初から友達の輪に入っていく積極性が見られた。ソーシャルスキルトレーニングを取り入れた事前学習を行うことで、自分のことだけを話すのではなく、相手が話していることに耳を傾け、その内容に関することについて一緒に話そうとするコミュニケーションスキルも少しずつ身に付いてきている。また、C中学校の職員室での挨拶も堂々で行うことができるようになった。

C中学校の生徒も、回を重ねることに、気軽に話し掛ける生徒が増えてきている。他のクラスの生徒とも、気さくに挨拶を交わし合うことができるようになった。体育の授業では、指示が分からない様子のA生徒を見て声を掛ける生徒がいたり、初めての球技活動や実験で上手くできないA生徒に励ましの言葉を掛けたりする生徒もいた。また、そうしたC中学校の生徒の中には、どの場面でも手助けをするのではなく、A生徒ができることは見守ったり、ときには真剣にゲームで勝負したりと、場面によって対応を変える姿も見られた。

5. 事後の取組、今後の課題

交流ノートに毎回感想を書き、その日の交流及び共同学習での他者との関わりについて振り返りを行うようにした。

これまで2年間、A生徒はC中学校で交流及び共同学習を行っているが、実際に会話をするなどの関わりをもったのは、男子生徒に限られており、その中でもペアになった生徒に偏っていたりする。さらに、いろいろな生徒との関わりができる学習機会について検討する必要があると思われる。

また、C中学校の教員に対しては、研修会を通してB特別支援学校の見学、障害の理解を図ることができたが、C中学校の生徒に対しての取組は行っていない。B特別支援学校の紹介やA生徒のB特別支援学校での様子などを知ってもらう機会がもてると、更に交流及び共同学習の意義が深まると考える。